

## O1-010

## LD児における漢字書字支援効果及び保持に寄与する背景要因の検討

成田 まい、小松 竜平、小泉 ひろみ

市立秋田総合病院 小児科

## 1.【目的】

LD児は反復学習法よりも言語情報に基づく学習法が正答率・維持率ともに高い達成を示すと報告されている(粟屋ら、2012)が、保持効率に関与する要因は十分研究されていない。本研究では、認知特性に配慮した漢字書字支援の有効性を検討するとともに、保持に寄与する背景要因を検討することを目的とする。

## 2.【方法】

対象：小児神経科医によりLDと診断された書字困難を示す小学2～3年生17名(WISCのFIQは83-132、PVT-Rは評価点7以上)。対象児と保護者に研究の趣旨と内容を説明し同意を得た。学習課題：認知特性に配慮した指導条件(WISCの結果より聴覚優位群と視覚優位群に分け指導)、反復指導条件(見本漢字を繰り返し書字) 手続き：平成26年8月～平成28年3月に全10～15回の少人数学習を行い、指導前アセスメント時(大プレ)、指導直前(プレ)、指導直後(ポスト)、指導1週後(保持1)、指導3ヵ月後(大ポスト)に、確認テストを実施した。

## 3.【結果】

学習支援効果の有効性を検討するために、聴覚優位群と視覚優位群でフリードマン検定を行った結果、時間経緯の中で統計的に有意な変化を示した。さらに、U検定を用いて認知特性に配慮した指導と反復指導の正答率を比較検討した。その結果、聴覚優位群では大プレから大ポストで1%水準の有意差を認めた。視覚優位群でも大プレから保持1で1%水準、大ポストでも5%水準の有意差が認められた。さらに聴覚優位群と視覚優位群の学習支援効果の検討を行った結果、両群の間に有意差は認められなかった。漢字書字習得の困難さの背景要因を検討するために、目的変数をポスト・保持1・大ポストの正答率、説明変数を学習基礎スキル評価課題(中ら、2014)のZ得点及びWMI・VCI・PSIとして重回帰分析を行った。(多重共線性を考慮しPRIは説明変数から除外)その結果、指導後には特殊表記課題において統計的に有意な寄与を示し、大ポストではWMIにおいても5%水準の有意な寄与を示した。

## 4.【考察】

反復指導では保持率が低い事例においても、認知特性に配慮した指導によって保持が改善した。従来漢字書字の困難の背景はWMの弱さであるといわれてきたが、書字達成にはひらがな表記スキルが関与することが示された。保持については、視聴覚記憶の弱さに関わらず言語性WMの弱さが影響する。今後院内では、発達検査に基づく認知特性の把握を強化するとともに、就学前段階のひらがな習得を促進する取り組みを実施していく。

## O1-011

## 発達障害児における身体「症状」表出の手段と保護者の理解

小畑 文也<sup>1</sup>、相原 正男<sup>2</sup><sup>1</sup>山梨大学教育学部<sup>2</sup>山梨大学医学部

## 【目的】

「痛み」「悪心」「疲労」等の内部感覚は出生後早期より発達していると思われるが、それらの感覚を表出する手段、特に言語の分化は一般的な言語発達より遅れる傾向にある。最も原初的な「痛み」に関しては2～3歳で「いたい！」等の語彙を獲得するが、「悪心」や「疲労」に関しては5歳の段階でも、成人に理解可能な語彙の表出は少ない(小畑 2015)。特にコミュニケーション上の問題を持つことが多い発達障害児においては、理解可能な言語表出の遅れは、疾病あるいは傷害への対応の遅れにつながると思われる。本研究では、発達障害児の身体「症状」の表出と、それに対する保護者の理解について明らかにすることを目的とした。

## 【方法】

対象児：幼稚園教諭から見て定型発達をしている幼児(3歳～6歳)の保護者60名

医師により知的発達の遅れがないと判断された発達障害児(ASD、ADHD 5歳～10歳)の保護者14名

調査方法：各症状をイラスト化した質問紙を併用した構成面接法による。

(症状) 腹痛、頭痛、切り傷、かゆみ、疲れ、めまい、吐き気、発熱

調査期間：2017年6月～8月：定型発達児 10月～12月：発達障害児

## 【分析方法】

1) カテゴリー分析：各症状に対する回答の内容に示された子どもの様子、保護者の気づきをその内容からカテゴリー化(教員1名、大学院生1名)し、各カテゴリーの度数を算出した。

言語：例 「痛い」「おなかが痛い」「うんち」

言語+動作 例：おなかをおさえて「痛い」と言う おなかをおさえて「うんち」

言語+動作+対処 例：おなかをおさえて「痛い」と言ってトイレに行く あるいは、薬を要求する

2) ワードマイニング分析：回答によって得られた保護者の発言をテキストデータ化し、各発言を文節に分ける。症状、感覚、対象群ごとに、出現頻度と共出現の相関、出現傾向、時系列を関数とし、キーワードを特定、そのキーワードをベースとして、2次元上に意味の布置を行った。

## 【結果】

「痛み」に関して、言語的には定型発達児とほぼ同じような発達をすると思われるが、痛みへの自己対処の能力は相対的に乏しい。疲労、悪心、発熱等に関しての言語表出は年長になっても困難であり、保護者の観察によるしかない。

内部感覚の発達は体験事象と深く関わるが、今回対象となった発達障害児の場合、「痛み」の代表は「腹痛」であり、言語表現もするが、大げさであったり、泣く等の行動も伴う。